平成 25 年 9 月号　№443

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
編　集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話（043）485-1801

最期の桜 ---------- 佐藤　昌子
日本人移民 ---------- 加藤　三郎
わすれない ---------- 佐藤　正信
夏の終わり・存えるべし---------- 栄藤　公子

吾輩はヒヨドリである（続編）

田村　孝則

縁あって吾輩が当家のお世話になってからまる7年が経った。奥様がいつも見ている『野鳥図鑑』を肩の上から覗いてみるとヒヨドリの寿命は5、6年とある。長生きの理由はまず、吾輩の食通ぶりにあると思う。桃にオレンジ、バナナにイチゴ、凡そ旬の果物は何でも食する。果物以外では、朝一番に主人の肩に飛び乗り、ギャーと催促して冷蔵庫から取り出してもらうミルワームが好物だ。主人はいつも朝三暮四といいながら四匹くれるが、吾輩は猿と違ってだまされはしない。それと週に何度かは、奥様にお願いして手のひらの上で水道水のシャワーを浴びることにしている。このような快適な生活と家中縦横無尽に飛び回る運動をしていれば、吾輩が鳥類では珍しい後期高齢鳥になる日も近いものと思う。

運動といえば、当家の主人はゴルフという珍奇なスポーツを飽きもせず40年近く続けている。それだけの長い期間普通のお稽古事をやれば、とうにお師匠さんになっている。ところが、最近やればやるほど、下手を固める結果となっていることに本人は気がついていない。気の毒なことだ。

話が変わるが、主人は昨年から公民館の料理教室に通い始めた。すぐに投げ出すかと思えば、不思議と続いている。「料理なんぞはその気になれば、何てことはない」と偉そうなことを言っているが、得意料理がカレーにポテサと餃子では聞いて呆れる。それでも週に一、二度台所でコトコト音をたてているが、奥様が横で口を出すので、言い争いが絶えない。世間一般では、食をめぐる争いごとは絶えて久しいのに、当家では未だに続いている。情けないことだ。

さて、主人が退職後濡れ落ち葉とならぬよう、奥様が勝手に申し込んだ市民カレッジも、早いもので今年4年目を迎えた。専攻過程は柄にもなく福祉コースということだが、何を勉強してどう役立っているのかさっぱり分からない。自分の親は国許の兄貴に押し付けて、何が福祉コースかと言いたい。鳥の世界では子が親鳥の面倒を見たという話は聞いたことがないが、主人も鳥と同程度である。

ある日の夕方、そんな主人が吾輩に卒業記念文集の原稿を代筆するよう頼みに来た。いつもドアの上から見ている主人の行状と市民カレッジでの出来事を面白可笑しく書くのは造作もないことなので、一羽根脱ぐことにした。おっとここで紙面が尽きた。ここらで羽根ペンを置く。

（編集委員）

最期の桜

その人はまず花びらに顔を寄せて香りを吸い、そのあと両手を合わせて拝み、こんな近くで今年の桜の花をみられるとは…と言い、目に涙を浮かべて、ありがとう！ありがとう！と何度もうなずいてみえました。

私は3年前から緩和ケア病棟でボランティアをしています。緩和ケア病棟に入院される方は余命数カ月のガン患者さんです。年を越して新年を迎えられるか…春を迎えて今年の桜（人生最期の桜）を見ることができるのか…と、桜に対する想いは人一倍強いようです。

そんな想いを叶える為にあるご家族は山形から冬桜をバケツ一杯取り寄せたり、自宅の浴室で何週間も庭の桜の枝を温めて蕾を開花させて病室に届けたりして下さいます。

今年の春3月29日、緩和ケア入院患者さん18名の方々の為にお花見の会が開かれました。当日は花曇りで風もややヒンヤリしていたので、庭の桜を見に行くのが無理な方の為に談話室に2メートル以上の大きな桜の枝が飾られました。車イスやベッドに寝られたままの患者さんが、ご家族に付き添われて談話室に入り、天井に届きそうな大枝に咲く満開の桜を見た途端、どなたも目を見張り次に満面の笑顔になられます。皆さんで桜にちなむ歌を歌ったり、お花見の思い出話をしたりして、最後にご家族や看護師さんと一緒に記念写真を撮ります。患者さんもご家族も目は涙でいっぱいですが、笑顔は嬉しそうです。

私は人生最期の桜をいつ、どの様に見るのかと想いを巡らせながら手作りしたカードに、写真を貼って届ける頃には今年の桜も散っていました。

（南ユーカリが丘　佐藤昌子）

わすれない

あの時の恐怖は今でも脳裏から離れません。平成23年3月11日午後2時46分ごろ、皆さんはどこで、何をしておりましたか。

小生は佐倉市役所本庁舎6階にて会議の最中でした。初めの揺れ方はいつもの地震と同じ様に、すぐ治まるものと様子を見ていたところ、それが終息するどころか、揺れが次第に大きさを増し、机が躍り、部屋の角に置いてあった消火器が横倒しになり、ころげまわっていました。

会議は即中止。避難の指示に出席者の多くはエレベーターのある方向に向かいましたが、小生は非常口に近い所に居たのでそこを利用して避難しました。この時の状態はまるで泥酔した時の千鳥足の様で、右往左往しながら、「人生これまでか」と頭を駆け巡る恐怖感の中、必死の思いで6階から1階中庭まで何とか無事に避難することが出来ました。

幸い当地域では津波の被害は考えられませんが、地震、火災、竜巻等に遭遇することが考えられます。昨今全国各地で頻繁に発生する地震報道には、多少の不安を覚えずにはいられません。

「災害は忘れた頃にやって来る」と言いますが、あの3・11を風化させずに、また、事の起こりを他人事とは思わず、「自助」「共助」等の精神を胸に、常日頃の備えの大切さを改めて思い知らされた出来事でありました。

（千成　佐藤　正信）

日本人移民

たまたま6月9日の民放で南米ボリビアに何故日本人の村があるのかとの放送があった。１９６０年に沖縄から移民した沖縄人だけの村であった。１９６０年は沖縄が日本に返還された年であるが、彼らは未だ米国統治時代の沖縄であったために米国人として移民し、その後、日本籍に変わったが、移民した当時は全くの荒野であった由。苦労して作物がとれるようになってから現地人に銃で脅迫され土地を奪われたという。沖縄人が団結して今では自ら銃で身を守りながら「沖縄」という名をつけた村を作っていた。

この放送をみていて15年前のアルゼンチンを思い出した。国際協力事業団（ＪＩＣＡ）の仕事でアルゼンチン北部のコルドバの国立大学の支援をしていたことがある。パラグアイの国境に近い。そこには日本人が結構多く居て日本人の学校まであった。明治時代、日本人は食えなくなった人達が棄民としてやってきたり、隣国のパラグアイも余りにもひどい環境の為、逃亡移民としてアルゼンチンに流れてきた人達も多く居た。南米の国境には何もないから越境するのは簡単である。何年か住んでいる内にその国の住人になれる。

アルゼンチン第二の都市のコルドバ市の日本人は働き者で正直であるとの評判で大学教授、市会議員、医者になった人も多く、アルゼンチンで日本人学校に通っている人も結構いた。学校には「勤勉」と漢字で書かれた張り紙があった。南米に移民した日本人は何処でも正直で働き者で我慢強い。南米の話を書けばきりがないが、この日本人の精神は今、何処にいったのであろうか。

（宮ノ台　加藤　三郎）

夏の終わり

ためらいを重ねて過ぎしこの夏の終わり色濃く百日紅（さるすべり）咲く

風鈴も電話も鳴らぬ一人居の真昼の庭に蟻の縦列

わが庭を毎日通る黒猫が国道のへり小さく死におり

ジョギングの足取りゆるめ汗拭う花百日紅の紅（べにふ）降る舗道（みち）は

言訳はきっと出まかせまだ紅（あか）き花殻（はながらひ）轢きてバスが過ぎゆく

夕暮がわれを影ごと塗りつぶすつかの間広場に満つる蝉声（せんせい）

存（ながら）えるべし

押してゆくパンク自転車　前籠に白き野菊とカマキリ入れて

蟷螂（かまきり）を捕るなと猫に諭しをり　鎌振りあげる身の程知らず

庭隅に主待（あるじ）つ犬待つ時間（とき）を重（かさ）ねかさねて一生（ひとよ）が果てぬ

せちがらき秋風ふく日も土井さんの畑の冬瓜（とうがん）どっかりとあり

降り棄てて存（なが）えるべしゴーギャンの南の国の女のように

風のまま散りくる銀杏を浴びて立つわれも日和のうすばかまきり

（井野　栄藤　公子）

9月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の２ページと３ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。**「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」**など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館　TEL０４３－４８５－１８０１

〒２８５－００２５　佐倉市鏑木町１９８－３

URL　http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

6月の或日の夕方、自宅でのんびりしていたところ、胸のあたりを不快な風が吹き抜けていったように感じた。

暫くして目が廻り出し何とも言えない嫌な気分におそわれた。食欲もなく吐き気もあり、こんな感じの体の不調は今までにあまり経験がなかった。その後、水分を2・3杯飲んで落ち着き、いつもの通り寝てしまった。

翌日、病院で診察を受けた。先生曰く、吐き気は目眩の一つ上の悪いサイン、結果オーライなだけ、等々。恐らく熱中症だったようだ。

これまでは自分や家族に病気の心配が降りかからない限り、健康の関しては無関心になりがちであった。最早、年令的に油断は禁物。暑さまだまだ続きそうです。水分補給をこまめにして予防しよう。

（大蔵　康次）

あとがき

「六十の手習い」と言うが、先日のテレビのトーク番組で歌手の中尾ミエさんが、60歳を過ぎてから絵を習い始めたという話をしていた。彼女は絵は苦手だと思い込み、それまで絵を描くことはなかったという。

しかし、せっかくの人生なのにやり残したことがあるのは損、何でもやってみようと一念発起して始めたところおもしろくなり、ぐんぐん上達したという。確かに最初の絵と、半年くらい経った頃の絵とでは格段の差が見られた。

私はというと、面倒なことは避けて通る性格。新しいことに挑戦してみようか？と思いつつも、「この年になって苦労したり恥をかいたりしたくない」と怠惰な日々を送っている。

読者の皆様はどちら派でしょうか？

（猪俣　民子）